

20 世紀前半アメリカにおける日系人の図書館意識

—アメリカ化の視点から—

Role of Public Library and Japanese-American in 20th Century —Americanization and Japanese Library—

学籍番号：201221585

氏名：向後直美

Naomi KOGO

アメリカ公共図書館における外国人に対する図書館サービスの歴史は、1900 年前後まで遡ることができる。その背景として、20 世紀前後に起こった「新移民」の大量流入が挙げられ、1900 年から 1920 年代まで、主に移民に対してアメリカ化運動が盛んに行われた。この流れはアメリカ公共図書館にも表れ、アメリカ化運動を移民サービスの中心としてとらえていた。ついでに、本研究では、アメリカ全土の移民サービスの傾向を明らかにするとともに、当時、人種差別の対象であった日系人の図書館意識についてアメリカ化運動を軸に明らかにすることを目的とした。

本研究では文献調査を行った。対象期間は 1900 年から 1929 年、対象地域はサンフランシスコ市を中心とした地域である。アメリカ全土の移民サービスの傾向を把握するために *Library Journal* の論稿を検討した。母語図書提供が最も議論されていたが、実際の移民のアメリカ化に有効に作用していたかは疑問である。直接的なアメリカ化運動は母語・英語で書かれたアメリカ情報の提供や英語教育、市民権獲得支援にみることができ、中でもアメリカ情報の提供が図書館関係者の間ではよく検討されており、重要な要素であった。

次に、日系人の図書館意識を明らかにするために『日米新聞』と『新世界新聞』を分析した。その結果、アメリカ公共図書館におけるアメリカ化運動に関する記事は見受けられず、アメリカ公共図書館は英語が不得手な日系人にとって身近な存在ではなかったと考えられる。一方、アメリカ公共図書館は日本に関する情報をアメリカ人に提供する場と認識されていた可能性がある。また、日系コミュニティが中心となって設置した日本語図書館については、(1)次世代の教育の場、(2)矯風活動の一環として健全な趣味を提供する場、(3)アメリカに関する情報を入手する場、という 3 つの機能が明らかになった。特に(3)から日本語図書館はアメリカ化運動の機能を有していたといえるだろう。これらの結果から、サンフランシスコ市立図書館の日系人に対する関心の薄さが日本語図書館に対して「教育」「娯楽」「アメリカ情報提供」の機能を付与することとなり、日系人はそこに日系人排斥の解決を期待していたことを明らかにした。

研究指導教員：溝上智恵子

副研究指導教員：呑海沙織